

尾北ホームニュースで掲載された
江南の昔話は、この冊子に掲載した
四編の他、まだ多くのお話があります。
その他の作品を簡単に紹介します。
江南市に伝わるお話は、まだまだ
たくさんあります。
また、探してみてもおもしろいですね。



神明裏の人柱 【宮田】

水害に悩む村では娘を人柱にと決めた。その話を聞いた通りがかりの老人が身代わりとなり、土の中から「南無阿弥陀仏」の念仏が三日間続いた。その後、村は水害にあわずにすんだという。

一つ輪伝説(一)おじやこさま 【後飛保】

昭和の初めの話。氏が森のぐみを食べようとし太い幹から落下。三日三晩うなされる。その太い幹が大蛇のようだったとか。その後も村人たちが、うちわのような耳をした大蛇をみたり通った跡をみつけたりするようになり「一つ輪だ」「大蛇だ」と言い、いつしか氏が森のことを「おじやこさま」と呼ぶようになった。

一つ輪伝説(二)円と千巻経 【後飛保】

大蛇が通った跡が一軒の屋敷前に円を描いてあった。ほどなくその家の女の子が亡くなってしまふ。祟りだと村人たちはおそれた。それから何年かたち、いたずらで古井戸に石をなげこんでいた子を托鉢僧がみつけ「千巻経」を家の主に渡す。一心に仏におがむことで祟りからまぬがれ、それ以降ご先祖さまを大切にしたいという話。

一つ輪伝説(三)クーニャン(支那娘) 【後飛保】

支那事変(日中戦争)が始まり、チャイナブームになっていた頃。夜遅くに、おじやこさま近くでチャイナドレスを着たクーニャンをみかけた男がいた。あまりの美しさに目を奪われていると、すーっと消えた。次の朝、一つ輪の跡がみつきり大騒ぎする村人たちが。昨夜の出来事と重なるので男は気味悪がって誰にも話さなかった。

飛保茶と北齋 【前飛保 後飛保 松竹】

まだ名が知られる前の浮世絵師北齋が、犬山城から曼陀羅寺を訪れた際、地元でつくる人気のお茶(飛保茶)を出した。すると、その色をみて「このお茶の色は、名づけるなら飛保茶色だ」と言い喜んだ。その後「飛保村曼陀羅寺全図」を完成させる。左下には北齋の印が残るその版画は今では幻の絵となっている。

飛保の赤門寺 【前飛保】

すたれていた寺を再興すべく三年かけて秀吉に懇願するがなかなか叶わない。その後一生懸命な働きぶりにやっと願いが届く。その功績を門を朱塗りにすることで後世に残す。

太子像と宗春 【前飛保】

尾張七代藩主宗春公が狩に出かけ、寺で休憩していると、住職から太子像をみせてもらう。その像を宗春は貸してくれといって城へ持ち帰ってしまう。三年ほどたったある日「かえりたーい かえりたーい」と幼子の声が寺から聞こえ、住職はあわてて宗春から返してもらったという話。(この太子像は江南市の文化財になっている)

鴨が池の蛙 【草井】

池の蛙がおせきばあさんをからかうように鳴くので、怒ってふんずけてしまう。が、それはただの鳴き声にすぎず、たまたまバカにされたかのように聞こえただけだった、という話。

草井地蔵 【草井】

年老いた坊さんが熱田神宮あたりで夜を明かしていると夢に金色の地蔵菩薩があらわれる。その声をたよりに北へ北へと歩き草井まで。そこで井戸の底からその金色菩薩を発見。大切に村人が守ることで大災害にあわなくなった。

林観音 【小杖】

田畑だけでは生計がたたず養蚕を始める作兵衛。病で蚕が全滅しても観音さまをまつた彼の蚕だけは無事だった。そこで村人も小銭を出し合い・・・。

家政公と大根 【宮後】

わんぱく童子が徳島城主となり仲良し連中が、名物の尾張大根を持って会いに行き親交を深める。しかし、親交の浅い連中は、名物でない河内大根で間に合わせてしまう。

清水のお菊 【前野】

大口村に住む美しい娘お菊は、毎日、前野の清水とよばれる湧池の横を通って古知野の工場へ繭の糸引きに通っていた。お菊と仲良くなった男が嫉妬のあまりお菊を殺してしまう。清水の近くの沼に変わり果てたお菊があったという。(今でもお菊の地蔵さまはまつられている)

若宮八幡宮 【力長】

若宮八幡宮は子どもたちの絶好の遊び場だった。悪ふざけしている子どもを叱った治兵衛は、その後、体調を崩すがすべてはご神体のせいだった。



久昌寺縁起(上)八大龍王 【小折】

日照り続きの村で、いつものようにお経を読んでいた和尚。ある日、一人の娘が両手を合わせて拝んでいた。名をきくと、五条川に住む八大龍王という。病に悩んでいたところお経の声に助けられ、治ったため、そのお礼として鱗を三枚和尚に渡した。このおかげで大雨となり村はうるおったという。

久昌寺縁起(下)吉乃の法名 【小折】

吉乃という美しい娘が織田信長に見初められ子どもを授かるが、二九歳の若さで旅立ってしまう。吉乃の遺骨は田代墓地、龍徳寺などに納められる。龍徳寺は吉乃の法名から二字をとり「久昌寺」と改め、思い出が永久に残ることを願った。

泣き地蔵 【小折】

盗つ人が尾張の寺から香川まで地蔵を盗んで運ぶが、あまりの重さに置いて逃げ出した。しばらくして地蔵がみつき桜の苗木をそえてもとの寺へ返した。その日が七月十六日と記されている。無事もどつた地蔵は、何か悪いことの起きる前になると、全身汗をかくので「泣き地蔵」と呼ばれ、今も親しまれている。

弁慶と二子山 【曾本】

若かりし頃の弁慶の怪力自慢話。小牧山をつくる弁慶とまじめに働く百姓とのやりとり。弁慶が去った後にできたのがこの二子山

だったという。

幼川の大なまず 【曾本】

釣り好きの百姓が大なまずを釣る。家に持ち帰ると急に雷鳴、豪雨となり「おさなや。おさなやー。」の声とともに、その大なまずは縄をぬけ逃げていった。「おさなや」とは「幼い我が子よ」「川の主よ」という意味ではないかと伝わっている。

足留地蔵 【曾本】

不作続きの村から家出する人が増加。何とかくい止めようと地蔵さまをまつた。ある日、突然一人娘がいなくなり懇願する母親に「地蔵の体や足を縄でしばれ」とお告げが。そのとおりにすると娘が帰ってきたという。

